

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第867号 平成27年1月22日

日本人の国民性

文部科学省所管の統計数理研究所は、1953年（昭和28年）以来5年ごとに行っている「日本人の国民性調査」の結果を発表しています（平成26年10月31日付北海道新聞他から）。

今回の調査結果を見ると、興味深い結果が散見されますので、調査を実施した統計数理研究所の資料等を基にその概要を紹介したいと思います。

日本人の長所について聞いたところ、下表の通り「親切」「勤勉」「礼儀正しい」を挙げる人が70%を超え過去最高となっています。

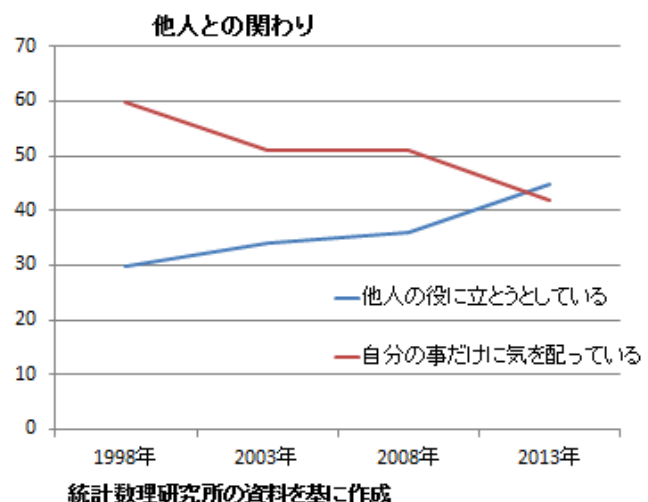
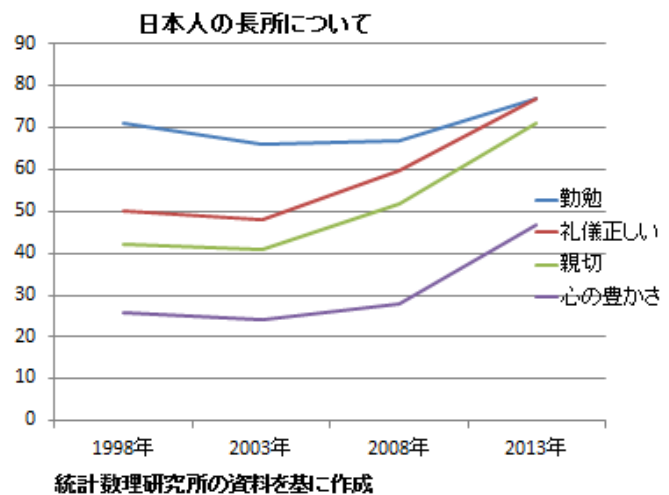
また、2割台で低迷していた「心の豊かさ」についても、47%と急速に回復しています。

こうした結果を見ると、日本人が日本や日本人の良さを再認識し始めたといえるのかも知れません。そのきっかけは今から4年前に発生した東日本大震災で、調査を実施した統計数理研究所では、東日本大震災で東北の人達の実直な姿勢を見聞きした事が影響していると分析しています（平成26年10月31日付北海道新聞から）。

これらに関連した項目として、大抵の日本人は「他人の役に立とうとしているか」、あるいは「自分のことだけに気を配っているか」を尋ねたところ、

「他人の役に立とうとしている」と評価している人の割合が年々増加し、今回の調査では45%と急増したのに対して、「自分の事だけに気を配っている」は42%と5割を切り、この調査を始めて以降初めて「他人の役に…」が「自分の事だけ…」を上回る結果となりました。

東日本大震災の際には、全国からボランティアが駆け付け被災者に対する支援活



動に従事しましたが、そうした姿に感動し、共感している人達が少なくないという事であり、他人の役に立つ事を肯定的に捉えているという事だと思います。

私は、「他人の役に立とう」という思いは「公共の精神」の発露だと受け止めています。

「公共の精神」というのは、「社会全体の利益のために尽くす精神」という事ですから、「他人の役に立とう」という思いと単純にイコールではありませんが、東日本大震災の際の被災者の方々の、忍耐強く、抑制された振る舞い、我が身を省みず住民を避難させた消防団員、汗みどろとなって被災者の救出に当たった警察や自衛隊関係者、そして被災者の支援に当たったボランティア等々、そうした多くの方々の姿から、「公共の精神」を感じとった人は多いのではないのでしょうか。

文部科学省は平成26年11月20日、中央教育審議会に指導要領の改訂について諮問していますが、その中に高校版道徳として「公共」が設置されている事に対して批判的な意見がある事を残念に思います。

「公共の精神」を涵養する事に批判的な人は、個人の権利が国家・公共という考え方の中で抑圧されるのではないかという事を懸念しているのかも知れません。

勿論、個人の権利は尊重されなければなりません。同時に、社会の一員として生活する以上、自分のやりたい事は何でも自由という事はあり得ないはず。社会との係わりの中で「人として如何に生きるべきか」、この重要なテーマについて、誰からも教育されずに自然の内に理解する事は極めて難しいのではないのでしょうか。

子ども達に対する「公共の精神」の涵養は、学校と保護者、地域が連携して取り組むべきものですが、取り分け学校においてはあらゆる機会を通して、教育基本法の前文にもあるように「個人の尊厳を重んじ、正義を希求し、公共の精神を尊び、真理と平和を希求する人間の育成」を目指し教育実践されるべきだと思っています。

(塾頭：吉田 洋一)